

鹿島灘における二枚貝類の資源状況

水産試験場では、鹿島灘に生息する二枚貝類の資源状況を把握するため、漁業指導調査船による採集調査を行っています。今年は、5～8月に調査を実施しました。調査は、大洗町大貫地先から神栖市波崎地先まで、約4 km 間隔で設定した16地先の距岸200～1,600 m に合計106地点の定点を設け、調査用小型貝桁網（桁幅56 cm, 爪間隔24 mm）をそれぞれ10分間曳網して行いました。採集された鹿島灘はまぐり・ホッキガイは種別に個体数を計数し、殻長と重量を計測しました。それぞれの定点での推定資源量は、面積密度法を用いて算出しました。

鹿島灘はまぐり — 推定資源量は2,240トン

貝桁網調査による推定資源量は約3,784万個、2,240トンと推定され、昨年（1,004万個、1,137トン）と比較して大きく増加しました。

これは、広範囲で稚貝の発生があったと推測される平成26年生まれのはまぐり（以下、H26年級）が成長して資源に加入してきたためです。各地区の灘側（距岸200-300m,水深2-3m）でH26年級と推測される40-65mm前後の小型貝が多数確認されており（図1）、特に平井やこれまで資源の少なかった波崎（須田～南部保護水面）地区での密度が高いのが特徴的です（図2）。

一方で、平成10年頃と比べると推定資源重量は20%未満と依然として低い水準にあります（図3）。H26年級は来年には70mmサイズまで成長し重量も約1.5倍に増加、再来年には80mmサイズまで成長し重量も今年の約2倍に増加していくと予測されます。資源を効率的に長く利用していくためには、小型貝での漁獲を控え重量が増加するまで待つ漁獲する取組が有効と考えられます。

ホッキガイ — 推定資源量は6,257トン

調査による推定資源量は約3,312万個、6,257トンと推定され、昨年（3,218万個、5,493トン）と同水準でした。1 m² 当りの平均分布密度は0～1.5個で、分布は汲上、荒井、平井、日川浜、須田、松下に集中していました（図4）。そのうち、汲上、平井、日川浜、須田、松下では、漁獲対象としてはやや小さい殻長90mm未満の貝の分布がみられました。

（定着性資源部 横山耕平）

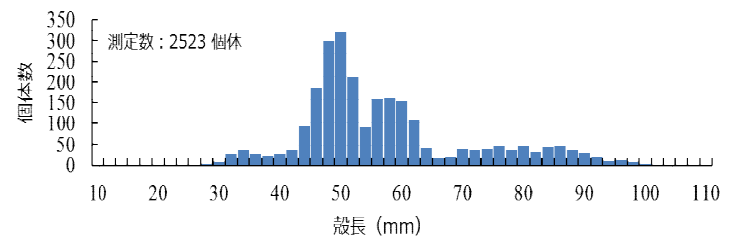


図1 採集された鹿島灘はまぐりの殻長組成

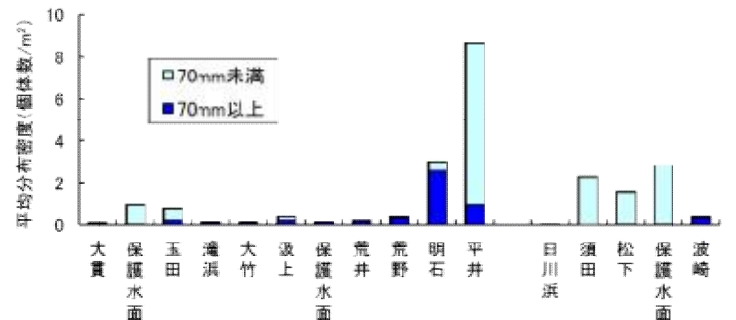


図2 鹿島灘はまぐりの地先ごとの平均分布密度

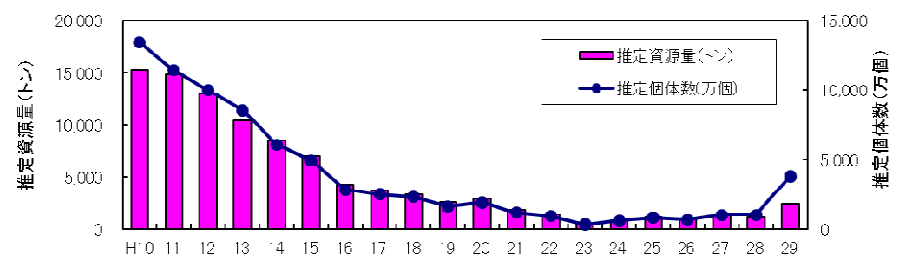


図3 鹿島灘はまぐりの推定資源量推移

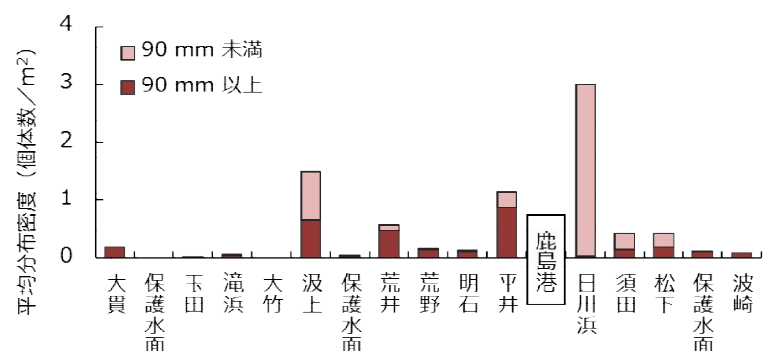


図4 ホッキガイの地先ごとの平均分布密度

【次号予告】 H29.10.10 発行の水産の窓は「10月の海況と今後の予測」を予定しています。